

『レディ・エミリーの事件帖 円舞曲は死のステップ』ターシャ・アレクサンダー 著 さとう史緒 訳

ご好評いただいている貴婦人探偵シリーズも、
おかげさまで第3弾。

今度の殺人事件ではなんと本シリーズではおなじみ、エミリーの親友の夫、ロバートが容疑者に…!

無実の訴え虚しく監獄に入れられたロバートを救うため、エミリー探偵が動きます。

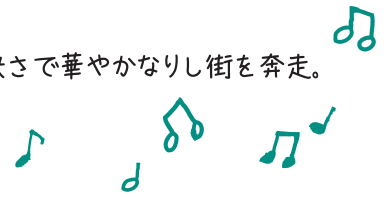
手がかりを求めてワルツ発祥の都へと舞台を移し、円舞曲のステップさながらの軽快さで華やかなりし街を奔走。

19世紀ウィーンの情景や数々の歴史的エピソードにもご注目を。

また本作には、婚約者コリンの元恋人が出現。

かつてコリンが本気で愛したレディだと知り、複雑なエミリーですが…!?

事件に恋に大ピンチな、シリーズ第3弾。ぜひとも第1弾、第2弾とあわせて展開いただきたい1冊です!(担当編集 M)



『致死遺伝子』リンゼイ・カミングス 著 村井智之 訳

殺人特区の外の世界は、
もっと残酷だった。
運命に立ち向かう、
緊迫のクライマックス!

病という病が根絶し、人口が爆発的に増加した社会“殺人特区”では、組織によりひそかに粛清が行われ、人口が抑制されていた——。少女メドウは殺人特区を支配するシステムを壊すために、反体制派とともに立ち上がる。だがそこで、システムの生みの親が実の母であり、システムを壊すためには、システムと同期させられたメドウが死ななければならないと知り……。 “病のない世界”という世界観に胸をときめかせる方、必読。今作ではメドウは初めて“殺人特区”の外の世界に飛び出します。外の世界で繰り返される人体実験とは!? 世界の鍵を握ることになったメドウの決断は!? 人気イラストレーター兼写実行さんが装画と挿画を担当、ますます見逃せない作品です!(担当編集 N)

『フィリグリー街の時計師』ナターシャ・プリー 著 中西和美 訳

ヴィクトリア朝ロンドンmeets

明治の日本!?

日本で暮らした英国人作家が

19世紀を舞台に紡ぐ冒険譚。

2016年度ローカス賞

処女長編賞

ノミネート作!



19世紀ロンドンといえば、シャーロック・ホームズでお馴染み。そのホームズの世界観に明治の日本人、しかもサムライ魂を受け継ぐ寡黙な長州人がいたら——。本書の主人公は2人。1人は孤独な英国人青年サニエル。そしてもう1人が、ロンドンで暮らす天才時計師の日本人ケイタ・モウリだ。モウリ⇒毛利。そう、彼は長州の毛利家出身で、伊藤博文の側近として働いていた過去をもつ謎めいた人物。そのモウリの手になる懐中時計が、サニエルの人生の歯車を思いもよらぬ方向へと動かしていく。一流のぜんまい仕掛け職人でもあるモウリは、当時ロンドンを揺るがしていた連続爆破テロの容疑者として疑われるのだが、彼を調べるために近づこうと、サニエルはモウリが渡英した真の理由を知ること。それはサニエル自身に深く関係のあることで……。 ミステリーとファンタジーが融合した不思議なストーリーに加え、実在したロンドンの日本人村や、東京、山口・萩城のシーンなど、著者が描く日本はよくあるステレオタイプな「なんちゃって日本」とは一線を画し、他にはないオリジナリティを本書に与えている。なお日本人キャラクターの漢字名のうち、著者からリクエストがあったのは主人公モウリ・ケイタにあてた慶泰の「慶」。Joy(慶び)の意味を持つことからこの漢字が好きだそうだ。(担当編集 O)